

り灯呂は漢土に走馬燈といへり、槐西雜誌に、壁上の畫ありくやうにみゆるを畫中人縁壁而行如燈戲之狀、まはり灯呂に似たるをいへり、

戴灯呂貞徳文集六月十三日條、戴燈籠笠鉾鐘鑄之時、躍衆之裝束不殘、可被恩借候、戴燈籠を板本にあげ灯籠と點を付たるはわるし、字のごとくいたゞきと讀べし、是をどり灯呂なり、京師花園は北山邊の在名なり、七月十五日の夜をどるなり、在所の新婦は、必置灯呂の尾のあるを頭に戴き踊るものなり、鐘鑄の風流に是を用ゆるなるべし、佐夜中山集、作りものや實にさまゝの舞灯籠とあるは是にや、廻り灯呂にはあるべからず、又茶人の用る櫻どう籠は、赤がれ煮ぐるめに、影透し櫻を、思に風雨をさくる爲とみゆ、軍中忍びの挑灯に倣へる歟、又釣瓶の如く動くかんで、らも、伴の挑灯俗に強盜挑灯と云ふより出たる也、

〔看聞日記〕永享四年八月七日、自内裏アヤツリ燈爐一被下、一谷合戰、鷓越馬追下風情也、殊勝アヤツリ言語道斷、驚目畢、自室町殿被進云々、自南都進、奈良細工所爲、奇得不可思議也、熊替、平山、先懸等在之、九月十三日、自岡殿宮御方へ廻燈爐一被進、結構殊勝也、室町殿上様入江殿へ被進燈爐云々、

〔倭訓栞中編五〕きりこ。棒或は燈籠にいふ、截角の義、かと反こ也、四角なる物の角々をきりたる形をいふと、壺氏の説也といへり、○中略きりこの燈籠は、曆家全書に方燈と見えたり、

〔還魂紙料上〕キリコ燈籠

きりこ燈籠のきりこといふに種々の説あり、切籠又は切紙と書は、紙を切てさげたるより當たるなるべし、紙捻をこよりといへば、紙にこといふ訓もありて、此説あたれるやうなれど、予○柳彦考ふるに、切子と書がおだやかならん歟、○中略さてはしの子、こたつの子といふも、左右に親にたとふべき柱あるに對しての名也、今障子の窓のことを、まやうじの子といふも同意、是よりう